第六二師團通信隊無線中隊の行動狀況について（沖縄県立第二中学校）

一、昭和二十年三月二十六日頃、通信教育を受けた県立二中校学徒約四五名位が、首里市赤田町在の六二師團通信隊、無線中隊（長 宮野中尉とかいっていた）に入隊した。

入隊后学徒は三、四名宛各分隊に配置され、一般兵と共に携帯用無線機による送受信、手廻発電機の操作、壕堀り、糧秣受領その他雑役任務につけられた。

二、昭和二十年五月初頃、浦添方面の戦斗に参加している石部隊（部隊名不詳）に、無線中隊から学徒数名が派遣されたが、その氏名は記憶にない。

三、昭和二十年五月二十六日頃、首里の戦斗が不利となり、南部への撤退を余儀なくされたので、無線中隊は分散して概ね左の経路を辿って撤退した。

首里撤退（五月二十六日晩）――識名――津嘉山――東風平――具志頭（五月二十七日晩）――東風平へ引返し――與座（高嶺）――真壁（五月二十八日晩）――広文仁――山城（喜屋武）（五月二十八日～六月二十二日）

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

四、昭和二十年五月末頃無線中隊から七里分隊（六月一日頃北垣内分隊長に代る）の一個分隊が、津嘉山の第六四旅団司令部に配属された。そのうち左記三名の学徒も一緒に配属された。

二年　佐敷興勇　生存
〃　仲里祥一　戦死
〃　山根文夫　〃

五、第六四旅団は津嘉山から二十年六月二日頃具志頭村新城を経て、喜屋武村福地に撤退し、約一週間位いして宜文仁村米須北方五一高地に移動した。

六月二十日頃通信隊（北垣内分隊）は、旅団長の命によって原隊復帰を命ぜられ、米須北方五一高地の壕を脱出して宜文仁の六二師団司令部壕に合流した。（北垣内分隊生存者佐敷興勇の資料による。）

六、無線中隊は、五月二十八日頃山城（喜屋武）に撤退してからは、通信機材の損失によりその機能を失ったので、隊員は自然壕や岩陰等を利用して戦斗を続けていたが、二十年六月二十二日頃斬込隊を編成し、約五分隊に分け、学徒もこれに参加、擲弾筒、手榴弾を持って通信隊の藤原という将校（少尉か中尉だった）が指揮し、約八〇米位いまで接近して来た敵に対し肉迫戦に突入したため、

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

我が方は戦死者が多数出た。
生存者は同地で六月二十三日頃米軍に発見され、屋嘉収容所を
経てハワイに送られた者もいる。

資料提供者
石川市二区四班　上原　安栄（当時二年生）

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp